3大感染症対策考える

岡山でセミナー　新薬開発など報告

AMDA・開発機構

国際医療NGO「AMDA（アムダ）」（本部・岡山市）とNPO法人「AMDA社会開発機構」（同）は、世界的に流行しているエイズ、結核、マラリアの3大感染症への対策について話し合う国際保健セミナーを26日、岡山市内で開いた。NGO関係者や、医薬学を研究する学生を始め、ドイツ、ルワンダ、カンボジアの保健当局の関係者ら約60人が参加し、それぞれの立場で感染症対策について報告し、知識を深めた。

23、24両日、途上国の感染症への取り組みを支援する民間財団「世界エイズ・結核・マラリア対策基金」（本部・ジュネーブ）が東京で開いた国際シンポジウムに合わせ、自治体単位の取り組みについて情報交換しようと、岡山のほか、札幌、仙台、京都など全国6都市で開催。シンポジウムでは、福田首相が2009年以降の数年間で同基金に5億6000万ドル（約582億円）を拠出する方針を表明している。

県内からは、AMDA社会開発機構の鈴木俊介理事長がホンジュラスでのエイズ対策を報告。岡山市保健所は市のエイズ対策や患者数の推移のほか、小中高でのエイズ感染防止に向けた出前講座などの取り組みを説明し、岡山大は薬剤耐性のマラリアにも効果がある治療薬開発などについて紹介した。

また、国立病院機構南岡山医療センターの多田敦彦・統括診療部長は、結核について県内の現状を報告。高齢化が進む県内の特徴として、60歳以上の患者が多く、同センターでは01年現在で入院者の65％を占め、このうち38％が75歳以上だった。また、アジアを中心とした外国人の患者も増加しているといい、医師とのコミュニケーションの難しさが、診療の妨げになっていると訴えた。